



3 9002 10764 3166

YOUNG WOMEN OF JAPAN



For unto us a Child is born, unto us a Son is given, and the government shall be upon his shoulder. Isaiah 9:6.

Vol. IV December, 1907 No. 11

Christmas Number CONTENTS

Christmas Greetings Editor

STORIES:—

Good and Evil Spirits.....Sazanami Iwaya
Cinderella and the Glass Slipper.....Okyosei

EDITORIALS:—

The Christmas Message A.C. Macdonald
Freedom in Bondage Y. Kawazoi

BIBLE STUDY:—

The Prayers of Jesus Y. Kashiwai

MISCELLANEOUS:—

Christmas Living and Christmas Giving
Translated from Henry VanDyke
A House on Fire D. Tachibana
A Poem Kanako
Parting at the Ferry..... A. Tanaka

ASSOCIATION NOTES:—

明治三十七年五月七日第三種郵便物認可

東京神田美土代町三秀舎印行



一 慰問部長

岡村 まこと

一 日曜學校部長

副島 さわ

一 祈禱部長の指揮の下に各々司會の任に當り毎週火、金二回開會す

但し一回火曜日は通學生の爲め

一 慈善部は重に裁縫、縫物をなし其に因りて得たる金額を慈善の爲め適宜に使用するなり毎週金曜日午後四時より五時半迄開く事に候

一 慰問部生徒の中に病人あり又附近頃より可憐な紡績の工女が臥床等に花とか、カードとか其他適當な品物を持參して慰問をいたし居り申候其實況は次號に記し申候

一 日曜學校は現在二ヶ所あり尙ほ多數の姉妹等は他の三ヶ所を授けに行き居り申候
過る週間定められし題目によりて祈禱週を守り多大の利益を得申候

片々録

大内淺子氏逝く

芝區三田普通連土女學校教師大内淺子氏は急性腹膜炎にて本月二日逝去せられぬ、氏は矯風會及び王女會等に盡力せられ且つ我が基督教女子青年會發會後本會にも多大の興味を以て夏期講習會の折などには大に盡されしが前途爲すあるの身を以て突然永眠せらる悼むべし。

平野はま子氏歸朝

本會中央部委員平野はま子氏は去る五月三井氏一行と共に歐米漫遊の途に上り西北利亞を経て歐洲に入り諸大都府を尋ね大西洋を渡りて米國に遊び遂に先月十一日無事歸朝せられたり。

明治四十年十二月十五日發行
明治三十七年五月七日第三種郵便物認可

明の治の子女

是故に我等召されてキリストの使者となれり。我等キリストに代りて汝等が神に和かんことを爾曹に布ふ。

哥林多後書五、二十



明治の女子
第四卷十一號
くりすますす號
次目

●善玉悪玉(お伽噺)..... 巖谷 小波

●玉の上靴(お伽小説)..... 櫻 喬 生

論 説

聖誕節の福音..... エー、シーマクト
牢獄の自由..... ナルド
川 副 櫻 喬

聖書研究

耶蘇の祈禱..... 鴻 峰 生

雜 纂

クリスマススの心と贈物..... バンダイク 博士
小火..... 橘 弾 菖
眞澄の甲..... 加 奈 子
渡頭の名残..... 田 中 六 州

女子青年會記事

青山女學院、ウキルミナ女學校、同志者女學校、横濱共立
學校、フール女學校青年會報告

●讀者諸姉に訴ふ..... 一 記者



明治の女子

「明治の女子」は日本基督教女子青年會中央委員が發行する機關雜誌也。
 「明治の女子」は一年分郵稅共金五拾錢一部郵稅共金五錢とす。

日本基督教女子青年會は青年女子の衛生、社交、智識、靈性上の發達を計るための團體也。

日本基督教女子青年會中央委員左の如し。

委員長 エム、エ、ホイットマン
 副委員長 岡見惠子
 記録書記 エ、ジ、ルイス
 會計 ファイ、シ、ヤ、ー
 萬國基督教女子青年會同盟委員 河井道子
 萬國學生基督教同盟會委員 宮川すみ子

東京在住委員

津田梅子 波部瀧子
 エ、ビー、ウエスト 井上友子
 平野瀧子

地方在住委員

大坂 ケー、ツリススラム 京都 ジ、エス、フェルアス
 仙臺 エル、ザフルー 名古屋 イ、エム、ソーバル
 廣島 エス、ジ、ケインス

日本女子基督教青年會幹事 エー、シー、マクドナルド
 同副幹事 エス、シー、フキツシャ

明治四十年十二月十三日印刷
 明治四十年十二月十五日發行

發行兼編輯人 東京市麴町區土手三番町十五番地
 エー、シー、マクドナルド

印刷人 東京市神田區美土代町二丁目一番地
 島連太郎

印刷所 東京市神田區美土代町二丁目一番地
 三秀舎

日本基督教女子青年會の事に付き御尋ねの節は東京麴町區土手三番町十五番地同會事務所宛にし御尋相成度候

明治十四年十二月十五日 第四卷 第十四號

明治十四年十二月十五日 第十四號

● クリスマスを迎ふ！

(一)

たのしきゆうべ！
うれしきあした！！
月も星も
しのめも、
神のサバスの
空高く、
太古ながらの
色ぞ貴き！

(二)

夕たのしや
あした嬉しや、
乙女子！
童兒！！
つどひ歌へよ、
よしや
シランの琴は
なくとも。

(三)

たのしき夕！
うれしき晨！！
世の詐りも
人の濁りも、
下界を動かす
牧場の角笛と、
神の御聲の
楽音にやすまむ!!!



善玉悪玉

小波

大むかし、この世界が出来立てのほや／＼の時わ、
 只漫々たる水ばかりで、それに數百萬の鴨が、暢氣に
 彼地此地泳ぎまわる他には、何も目に入るものわあり
 ませんでした。

ある朝の事です。東から昇つた太陽が、五色の雲の
 間から、光つた頭を出さうとする時、この數百萬の鴨
 わ、何れも波の床を放れて、羽叩きしながら空を見あ
 げますと、こわ如何に！空にわついに見た事も無い美
 しい一人の女が、さも楽しさうに舞つて居ります。

鴨共は大きに驚いて、皆一つ所に集まり、「全體あれ
 わ何だらう？」と、頻りに青い首を傾けました。誰
 一羽知つた者がありませんから、そこで皆一所に成つ
 て、空へ高く飛び揚がり、その女を捕まへに行き、數
 萬の羽根で軽くおさへて、兎も角も水の上まで連れて
 来ました。

で、尙よく／＼見ますと、如何にも可愛らしい女で
 すから、此儘其所に置いて、毎日一所に遊び度いと思
 ひました。が、何しろ自分達とは違つて、相手わ人間の
 事ですから、何を食べさせてよいのだから、それが一向
 解りません。

すると、同じ鴨の仲間に鴉と云ふ者が居て、此がよ
 く水を潜りますから、まづ水の底へ行つて、何か食物
 を探して来る事に成りました。

鴉わ心得て、それからと云ふものわ、毎日水の底へ
 行つて、何か知ら食物を取つて来てわ、この女に食べ
 させましたから、女わまたそれに依つて、二月三月の間
 と云ふものわ氣樂に鴨と遊んで居たのです。

が、鴉も初めわ骨を折りましたが、後には段々而倒に成つて、自分で深い底まで行くのは、如何にも厭てたまらなくなりましたから、ある時例の海の底で、一匹の龜に會つたのを幸ひ、それから後わ自分の代りに、龜に食物を取らせる事にしたのです。

するとこの龜は、水の底の土を、口一杯含んで浮き上りました、その土を女の前に置くと、見る／＼此土が、四方八方に廣がつて、果わ水の上に陸をこしらへました。

否、只廣がる計りてわありません、やがてその土の上に、例の女が手をかざしましたら、二人の可愛らしい嬰兒が飛び出し、そしてその嬰兒が、見る／＼中に成人して、足も達者に駆けまわれば、口も達者に喋べり立て、さも面白さうに遊びまわります。

又その毎日の遊びわ、二人でこの土の端を、グルリと一廻りするに極まつて居ましたが、その間もこの土が、ズン／＼廣がつて行きますので、遂にわこの子供達の足でわ、とても一日に廻り切れなく成りました。

けれどもまた二人の子供わ、毎日精出して駆けて居ましたが、その駆けるのが、いつも右と左へ別れて居たので、日を経るに隨つて、この二人の性質までが、段々違つた方に向ひ、即ち一人わ人が善いのに、一人わ悪者に成つて、初わ仲の好かつた者が、果わ喧嘩斗りする様に成りました。

例へば善い方の子が、益に立つ物を植えやうとすれば、悪い子が來て掘り返へして、代りに毒の種を蒔きます。一人が玉蜀黍を作れば、一人が藪を作り、兄が鳥を開いて居れば、弟が山で木を焼くと云ふ、まるで反對の事ばかりするのです。

尤もその時分にわ、玉蜀黍が大層好くて、とても今のとわ比較物に成りませんでした。所がまた一方にわ縦の實も焼けば食べられたものです。て、兄わ頻りに玉蜀黍を食へ、弟わ縦の實を焼いて居ましたが、或る時二人が喧嘩して、弟わ縦の實を焼いた灰を、兄の玉蜀黍の上から被せましたから、それ以來味が變つて、すつかり不味成つたと云ひます。

さてこの兄弟が、年を取れば取る程、いよ／＼仲が悪くなりました。

すると、或時天の神様から、善い方の子に御聲が掛つて、

『コレ／＼、お前の弟を悪い奴だ、實にお前を殺さうと思つて居る。尤もその殺す前にわ、例の悪智恵を以て、お前にさも申戯の様に、何が一番恐いと聞くだらう。その時お前を、燈心で突かれるのが一番恐いと云へ、さう云へば弟を、弱い奴だなア、おれを燈心などより、鹿の角の方が餘程恐いと、事實の事を云ふだらう。かうしておけば、後にお前を殺さうとしても、決して恐い事無ゝぞ。』

と、かう云ふ御告がありましたから、兄は不思議に思つて居りますと、間も無く弟がやつて来て、

『兄さん！お前何が一番恐い？』

と聞きなすから、神様に教わつた通り、

『何が恐いと云つたつて、燈心で突かれる位恐い事

無ゝぞ。』

これも神様の御言葉通り、

『弱い奴だなア。燈心より鹿の角の方が、どんなに恐いか知れないのに……』

と云ひましたが、やがて燈心を持つて来て、いきなり兄に突いてかゝりました。

けれども兄は蚊に刺された程も感じません。所へ天から落ちて来たのわ、大きな鹿の角でしたから、兄は直ぐにそれを拾つて、弟に向いますと、弟は肝を潰して、其儘何所へか逃げて行つてしまひました。

さてそれで、悪い弟は居なくなりましたから、これが爲めにこの世界は、善い事斗り行われて、人も鳥も、獸も蟲も、木も草も、皆神様の御恵みに依つて、段々榮へに榮へましたが、それでも時々毒な物が出たり、悪い事が起つたりするのわ、その悪い弟の詩いた種が、まだ残つて居る故だと云ひます。

玉の上靴

櫻 喬 生 譯

昔、或る處に美しい三人の姉妹が居ました。其の中でも二人の姉は、外觀を飾ることが大好きで、金銀などは皆流行の衣裳や化粧品などに使ひつゞして居りました。家には別に下女といふものが居りませんので、一番年少のシンデレラーといふ妹さんが、家事向き一切の仕事を行つて居りました。

或る晩のこと、其の國の王様が、皇太子の丁年に達せられたお祝ひの爲に、盛大な舞踏會をお開きになりました。二人の姉たちは、こんな時にこそと思つて、早速美しい新衣を着け、髪には奇麗な鳥の羽を飾り付けて、眞先に舞踏會にと参りました。が可愛さうなのはシンデレラーで御座います。胸には舞踏に行きたい希望が一杯ですけれど、姉のやうに立派な衣類はなし、其れに今宵の留守居を命せられて居るので何とも仕方ありません。此の日も矢張り一日の仕事を終え

て、寒い晩に、爐の邊りて火を焚いて、茫然と腰は下ろしながら、淋しいやら悲しいやらで、今にも泣き出さん計りの有様でした。其の時に。

「一體、まあ、如何したのかえ？」

俄かに優しい、澄み渡つた御聲が、室の一隅に響き渡りましたので、シンデレラーは吃驚して振りかえつてみますると、如何にも美しい神々しい教母のお姿が現はれて居るのでした。シンデレラーは、もう嬉しうて／＼てたまらず、

「妾もあの、是非、舞踏會に参りたうございますの……」

さも、なれ／＼しう誠心こめて訴へましたので、教母の御顔には、いつとはなく美しい笑がこぼれて、
「それだけのことなら、何もわけもないこと、早速望み通りに叶えてあげましょう」

と、教母は手に持つた魔術の杖で、軽く少女の身を突きました、すると、今迄汚れ／＼ていた古衣の衣は、不思議や眼も眩む程美しい舞踏服となり、房々しき髪

の毛は、芳しい花飾りを付け、兩の足には奇麗な玉の上靴をはいて居たのでした。

不思議は是のみに止まらず、瞬く中に南瓜が立派な馬車と變りますし、七疋の廿日鼠が七頭の駿馬となり、大きな二疋の鼠は御者と別當となつて、美しい人間の姿を現はしたのです。

教母は、やがて優しい御聲で、

『この馬車で早く舞踏の席に御出でなさい。

だがね、餘り遅く迄残つて居てはいけませんよ。夜の時計が十二時を打つたら、直様馬車も別當も、みんな元々通りに南瓜や鼠に還つて了まうのだから、この時間を違えぬやうに！

かく、注意を興へて、美しい教母の御姿は、頓て天高く消え失せてしまいました。

シンデレラーは九で夢に夢みる心地、暫らくは只心から教母の御恵みを感謝して、直様例の馬車に乗り、急き舞踏の席にと馳せ付けました。

日頃、柔和な、やさしい天質の美しさは、華麗は服

装に一段の美を増して、宛然天女の天降つたのかと疑はれる位、勿論、二人の姉を始め、誰一人として、彼女の女がシンデレラーであらうとは思ひ掛けさせむてした。

皇太子は美しい天女のやうな此の少女と共に、終夜楽しく舞踏せられましたが、少女は教母の、戒めがありますので、十二時前に無理に御隙を願つて、例の馬車で家に歸りました。そして、二人の姉が家に着きました時は、不斷の汚れた古衣の儘で、相變らずいつもの通り爐邊に火を焚いて居たのでした。

シンデレラーは床に就いてから、姉二人が今宵皇太子のち相手になつた美しい貴婦人のことを何かとひと／＼話し合つて居るのを聞きました。

次の週間には再び宮廷で、前よりも盛大な舞踏會が開かれましたので、教母は今度も以前の通り美しい玉の上靴をはかせ、例の七頭引の馬車で、シンデレラーを舞踏の席に送りましたが、衣類は、みんな新らしい宮廷式の華麗なものでありました。

シンデレラーは此の夜も皇太子の御相手をして、楽しく舞踏しましたが、其のうちに時計は夜の十二時を報りました。吃驚したシンデレラーは、ふいと教母の戒を思い起しましたので、一目散に戸口を目掛けて馳せ出しました。

其の途端に、どういふ機會であつたのか、一方の上靴が抜け落ちましたので、皇太子は御手づから、丁寧に其を拾い取られました。シンデレラーは、もう約束の時間が切れましたので、戸外には馬車も居ないし、別當も居らず、元の古衣の儘で、片手には左の玉の上靴を持ちながら、里餘の長途を徒歩で歸るより外は無かつたのでした。

やがて、二人の姉が家に着いた頃は、例の爐邊に唯一人茫然として、樂しかりし今宵のさまを思ひ出しては、一人でしくくと泣いて居ました。けれども姉たちは、別に可愛相とも思はず、又慰めてやらうとも思いませんのです。何と悪らしい、片意地な姉達ではありませぬか！

諸、皇太子は、過ぎし舞踏の夕、玉の上靴を落した、美しい優しい乙女を宮城に迎えたいと思ひました。

そこで、父なる王様は、國內隈なく使者を立て、此の上靴をはくことの出来る女は、誰でも太子の妃になれるのだと布告を出しましたので、貴婦人や富豪の娘などは、皆われも〜と先を争つて其の靴をばいてみました。奇體にもあまり小さすぎるものですか、普通の女の足にはどうしても合はないのです。

かくて王様の使者は巡り〜て、遂にシンデレラー姉姉の家に参りました。二人の姉は早速に試つてみました。始めは右足を……そして次には左を……でもすつかり駄目でした。

玉の上靴は二人の姉の足には餘りに小さ過ぎるのでした。

さつきから、室の一隅にもち〜して居たシンデレラーは耻かしさうに進み寄りまして、

『どうぞ、妾にもはかして戴きたうございます』
二人の姉は中途で遮り

『馬鹿なこと仰向い！ 妾達さへはけないものを、そんな、みつともない妾のお前が……』

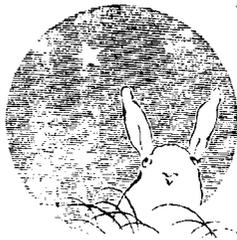
皆まで言はず、王様の使者は、大變可愛相に思ひまして、乙女の願を許してやりました。シンデレラーは、あの舞踏の席で自分が落した靴なのですから、何の苦もなく其の上靴をはいて、今一方の靴を懐から求めて、丁寧に使者の前に示しました。之を見て二人の姉は大變に驚きましたが、使者の人々も暫らくは茫然として、乙女の姿を見守つて居ました。其の刹那に敎母の御姿が再び現はれまして、以前の通り、魔術の杖で軽くお突きになると、シンデレラーの古びた衣は、舞踏當時の立派な華麗な服装となつて、再び美しい天女のやうな姿を現はしたのです。

王様の使者は、大變に喜び驚いて、早速この旨を王城の方へ復命致しますると、王様も太子も大に喜はれまして、城外まで侍従と共にシンデレラーを御迎えになりました。

其夜、王宮では、百官列座の前で、壯嚴華麗な結婚

の儀式が行はれました。

幾程もなく、父なる王様が御崩御になりましたので太子は眞様其の後を嗣いで、王様の御位に上られ、シンデレラーも王妃の尊號を受くるやうになりました。けれども、性來柔和な、優しいシンデレラーは、酷く自分を待遇た姉二人の罪を許して王城に呼び入れ、一家姉妹打揃つて、末永く楽しい歳月を送りましたさうです。目出度し、々。





聖誕節の福音

エー、シー、マクドナルド

聖誕節の福音は、無上の喜悅の響を傳ふ。傳へ言ふ。榮光の主この世に生れまし、日、空に燦亮たる音楽起りて、歡喜と勝利とのめてたき頌歌を奏したりきと。實にやまのあたりその天上の歌聲を聞きし者は、そこに居合はしたる數人の物學びの道に暗き牧羊者に過ぎざりけんも、人間靈魂の神を希求渴仰する普通の慾求は、其時天使が『われ萬民に關はりたる大なる喜悅のあとづれを爾曹に告ぐべし、それ今日ダビテの邑に於て、爾曹のために救主うまれ給へり、是れ主たるキリストなり』と謠ひて廣く天下萬衆に宣したる詞にこそ、

いみしくも反映せられたれ。

爾來喜悅と普通とは、聖誕節の福音となりなき。人種の別とか、皮膚の色とか、自己の生息する時代とか云ふ衣一枚を剥ぎ取れば、何くの人も其心には、同じ憧憬と向上との情念を懷くものぞかし。『我は最高の或物に到達せんがために此世に下されたるなり、單に我といふものを超越して更に真理なるものありて、我は之を捕捉し、同化して、之を我生命と混融すべきものと、生活の本體は單に過去と現在とにて作りあげられたるものにはあらで、過去といひ現在といふは、更に貴き眞生命の基礎たるに過ぎざるものなり』との自の心を得たる時、人は始めて我に歸るものなり。動物中にて直立して歩み、思ふがまゝに上を仰ぎ見ることを得るものは、只それ人間あるのみ。是れやがて人間の靈魂の眞生命の象徴にあらじやは。詩人ブラウニングは、『アンドリア、デル、サートー』と云へる驚くべくたへなる詩中に、克く此間の消息を漏らせり。ブラウニングは此藝術家を以て、名譽心の最高頂に達し、且

つゝ一擧して己が遠大の抱負を實現したるものとせざども、而かも之がために却て彼を失敗の人として譴責せり。其語に曰く

『あゝ去り乍ら理解より

遙かに技巧の秀てなげ

などかは仰ぐあまつ空』

と。智識に屬ける事にもあれ、精神に屬ける事にもあれ、苟くも人が自己の力量技能を以て満足するに至らば、そは失敗の人たらずんば非らず。眞個の人の標識は、眼を擧げて更に高さもの 更に眞なるものを望見し、之を渴仰し之を追蹤して進む間にこそ顯はるゝなれ。

更に驪つて思へば、人の心の奥底には平和を求むる熱情あるものなり。けに吾等は奮闘し、且つ奮闘を愛す。されど勇猛精進の生涯にも、その努力があだに終る事なからんがために。吾等は平和と靜穩とを喘ぎ求む。いかばかり勇猛精進が望ましとて、空々漠々としてあてども定かならぬ所に、力を鼓して進み行くとも

何の得る所かあらん。吾等が勇みて進む行く手には目的地なかるべからず、又心の内には信賴するものなかるべからず、徒らに狂暴の客氣に逸りて盲進せんも益なきわざどかし。嗟呼、若し人生が、昨日は東今日は西と、誘ふ水のまにまに漂ひ行く根無草の如き果敢なきものに非る限りは、人の進み行く所、その行路を導きて正義に向はしむる力のなかもやも。將又人がうば玉の闇になやなき巷を彷徨ふ時、之を勵まし之を強めて、中途にて沮喪せしめざらんとする力のなからてやは！

耶蘇基督の教は、各人の生涯に普通なる慾求を充たすものなるが故に、之を普遍的宗教とぞ云ふなる。『我は神の深き事を窮むるを得んや』(約百記第十一、章第七章)とは、古往今來、ある程度に於て反響せられたる聲なり。暗雲冥霧四邊を封じ罩めて、人生は根無浮草に等しきものならずやと迷へる時、喜悅の調は千古に響けどて揚げられたる聲あり、曰く、『我は世の光なり、我に従ふ者は暗き中を歩まず、生命の光を得るな

り』と。又曰く、『我が來たるは爾曹をして生命を得しめ、且つ之を豊かに得しめんがたあなり』と。更に又曰く、『爾曹若し我を知らば、神を知らん』と。斯る聲の響きし時、失意の人は忽ち氣力を恢復し、斷腸の人は忽ち頭を擡げ、此等の言葉は人の希望や向上心の果敢なさを嘲笑ふに非ずやと思ひめぐらす。斯る時に更に聲あり、憧憬欽仰の對象として、真人の胸底深く彫り附けられたる語を反響して曰ふ『我は道なり、真理なり、生命なり』と。この聲は次第にその優しさを加へて、遂に價值ある生涯の眞の原則を闡明せずんば休まず。曰く、『人の子の來るは、人を使ふためには非ず、却て人に使はれ、且つ多くの人に代り、その命を與へて贖とならんとためなり』馬可傳第十章第四十五節と。嗚呼生命を他に與へて仁義を行ふこと、是れ豈奮闘の人、蹉躓の人、墮落の人に對する至大至高の愛の表現に非ずして何ぞや。あゝ、之を實行したる主の生涯こそ、應て吾等の向上心のこよなき目的地と云ふべきなれ。さるにても、此の千古の眞理を看破し唱導したる

主は、げにも吾等後崑の典型なる哉。基督が人々の心に告げ給ひし御言葉は、極めて簡單にして明瞭なりき。されど簡單にして明瞭なる教訓は、皆人のおしなべて要求するものなりしなり。主は宣ひけらく、『我に従へ、さらば爾曹は神を知ることを得べし』と。又語を續けて宣ふやう、『我に従へ、さらば爾曹は、愛と同情との熱火内に燃えて、墮落せる人や失望する人を助け導き拯ひ勵ますは休まずるに至るべし。我に従へ、さらば爾曹は力を得て、專念向上の本願を振り起し、勇猛精進して勝利を收め、無限無疆の平和に到達することを得べし』と。如何なる人も、之を目標として進まざる者はあらず。されど或る者は頼る所を知らず、導く者を得ずして、只徒らに盲進しまた蹉躓す。斯る折しも基督の靜かなる御詞は響き來りて、その効能を試めしみよと人々を招く。若しその御詞にして尙ほ効果虛無ならんには、人生に満足てふものは又とあらし。蓋は、教へも富も文化も、未だ曾つて基督の御詞が各人に示し給ひし物を提供したるためしなれば也。げ

にその御詞こそ救世濟衆の福音なりけれ。人誰れが救

濟を希求せずと言ひ得る者あらんや。あゝ我等は妄想

雜念、傲慢貪慾、汚穢醜惡、悲痛哀傷、愼恚憤怒、困

憊疲勞の域より拯ひ出されんと願望、刻々切なるも

のあるに非ずや。聞けかし、聖誕節の福音を。而して

汝の内在の生命をして、充足せられざる希求渴仰の心

意と、疑惑昏迷の自覺とを提げて、其福音の響に應ぜ

しめよ。主のたまはく、『すべて疲れたる者、又重荷を

負へる者よ、我に來れ、我爾曹に平安を與へん。』と。

我等が追求するものが、空華幻影の類ひに非ずして

確實なる祝福たることを知らば、我等は奮闘に堪ふる

ことを得べし。我等の行旅が一敗地に塗るゝことなく

して必至の勝利を獲得する信仰あらば、我等は苦戦を

連續することを得べし。若し又我等が憧憬欽仰する光

明と生命と眞理とに、未遂に到達し得べき希望ある時

は、我等は絶えず勇猛精進することを得べし。重ねて

宣ひけるやう、爾曹わが語に居れ、さらば爾曹は眞理

を會得し得て、而して眞理は懸て爾曹を自由にせん』

と。

自由——さなり、高尚な生活に入る自由、奸邪罪惡

に挑戦する自由、生命と愛と義務との實相を悟了する

自由、他の人々をして眞理を會得して喜悅の滋雨に浴

せしめんがために、主の模範に従ひて、喜び男んで我

等の生命を與ふることを得る自由、嗚呼これ等は基督

に従ふ者の特權として受くることを得るものなり。さ

ればブラウニングはちのが詩中のアンドリアの外なる

藝術家の口を借りて、眞生命を追求するさまを、うべ

もこそ言ひ出でけれ。

『この世は穢土かきにあらず、

見果てぬゆめかさにあらず。

酌めども盡きぬ意義に充ち、

めぐみ溢ふるゝ世のなかの、

こゝろを探ぐるわざをこそ、

わが身をやしなふかてとせめ。』

牢獄の自由

櫻 喬 生

清らなる晩秋の一日、生は獨り西大久保の寓居を出て、其の昔、艶名を轟かした小町美人が、艶な姿を流れゆく此の橋畔に映したといふ姿見橋を北へ、根生院から薬師堂の池畔を廻つて、一種骨身に徹するやうな、爽やかな秋景色を賞でつゝ、懐かしい雜司ヶ谷の森に入ると、幽鳥は仄かに美妙の歌を送つて、心から塵埃騒呼の俗情を洗ひ落すことが出来る。

鬱平と茂た林地を抜けて東方田圃の細路に出ると、巢鴨の牢獄は嚴しい柿色の煉瓦塙を周らしながら、元として眼前に近く突き立つて居る。噫、罪に苦しむ幾多凶徒等が心には、此の澄みちぎつた、晩秋の光が如何に映つて居るのかと思ふと、すゞる同情一滴の雫も止めかねるのである。

あゝ現世の陰府、人間罪過の聚容所たる牢獄！此の牢獄の生活ほど人の心に悲慘な深刻な影を刻み付く

るものはあるまい。鐵窓の中、陰暗の境、肉體自由の權を奪はれ、外界人事の交渉を絶たれ、懐かしい天地自然の慈愛に洩れて、薄墨色の鐵鎖は堅く深く肉體に喰ひ込まうとする現世ながらの地獄の境涯に、何人か自ら求めて足を牢内に踏み入れやうとする者があらう。何人か好て自由の空氣を滅絶しようとする者があらう。世人が擧て蛇蝎のやうに恐怖して居るのも無理のない話である。

然らば所謂現世に於ける牢獄なるものは、全然陰府同様な苦痛三昧の劫界であらうか、自由の氣慰安の風は一滴も味へない地獄焦熱の境涯であらうか。生が少しく述べて見たいと思ふのは、正しく此の一點に存するのである。

前號「感謝の生涯」の中にも一寸述べておいた通り、世の中には決して絶對の苦しみもなければ、又絶對の樂しみもない。苦樂の關係は丁度斜へる繩のやうなもので、決して之を別々に感味することは出来ぬ。生は此の論據より出立して、牢獄の悲慘な境涯の裡にも、

尙、一點麗しき自由和樂の微風が、絶えず神の御胸から洩れ出て居ると斷言して置たいのである。

一度眼を人文發達の内容に注ぎ、囚人生活の狀勢に及だ人には、少なくとも地上の苦界たる牢獄の裡にも、尙一種端巖にして犯すべからざる威風と春風駘蕩たる和樂の境涯との存立して居ることと認むるであらう。

有徳非凡の君子佳人が、罪なくして牢獄に投せられた場合に、此の忌み恐るべき地上の暗所も、俄かに光明確躍として、麗しく天國化せられた事實は、吾人が東西歴史の一卷を繙ひて、等しく主肯する所である。否、世には牢獄の生活を経過したるが爲に、却て一代を飾るべき高價の修鍊と、貴き思索的大作とを殘して後世人心の羅針となつた例は幾らもある。文人といはず、宗教家と云はず、政治家哲學者乃至は美術家畫家の多數を包含して、此の種の實例は數限りなく并べあぐることが出来やうと思ふのである。

今試みに其の一例を示してみると、古昔、ソークラテースは或る愚昧なる一派の讒咀に依て、アゼンスの

一牢屋に送られたが、彼が胸深く潛める哲學的思索は、愈燃えて愈旺盛となつた。斯くて死の宣告を受くるや、牢獄の門を出て心靜かに毒杯を傾けむとする眞際、死別の爲めに集り來れる弟子たちに向ひ、悠揚として靈魂の不滅説を講じた。かの「フキードラス」の一卷は、二千餘年の今日、なほ輝々として榮えある當時のさまを偲はせて居るのである。デヨン、バンヤンは牢獄生活の中に一代の傑作たる天路の歷程を脱稿し、ダニエル、デフラーは、二年の間ニューゲートの暗所に呻吟しても、尙愈精神生活を依續した結果は、十八卷の著作となつて、今に其の名を後世に傳えて居る、身は一天萬乘の王家に生れ、ウキンゾル宮殿の一室に捕はれるの身となつて、徒らに青春の情に悶えて蘇王ゼームスは、榮え行く濃花に心血を灑いで、『キングスクチャ』の大作を完成したのである。詮する所、彼等は著しく肉體の苦痛と束縛とを感したるが故に、其の反響として、靈的活動の旺盛を來したものと云はねばならぬ。

あゝ靈的修鍊、一代の傑作、等しく是れ牢獄の生涯

が、吾人々類に與ふる貴き賜の一現表ではあるまいか！

神は縱令人類が悲慘なる苦境に泣いて居る眞際にて、決して之を過眼し放任し給ふことはない。かの牢獄の暗い凄い境涯の中にも、神の慈愛は鐵窓の隙より、尙香しき春風と薫して、幾多罪人の心を和けて居るのである。噫、誰か牢獄は人類を苦痛の極にのみ繋ぐ所といふ？縱令肉體は自由を絶たれ、鐵鎖は堅く手足を縛ることがあつても、奇し妙なる人間の靈は、是位な力でどうして貴い自由の性を拘束せられることがあらうか、獄卒や薄墨色の冷たい鐵鎖位で、黙つて縛られるやうな、そんな果ない脆いものではないのである。人力では到底始末に付かぬもの、是が吾人精靈の貴い所以ではあるまいか！

見よ、賤山がつの匹夫匹婦でさへ、一念斯様と心に誓つた以上は、如何なに烈しく強迫しても、どんなに苦痛の責を加へても、毅然として動かぬ一種古英雄の面影が存して居るではないか。否、却つて強迫の加は

るだけ、それだけ反杭的信念の焔を高むるもの、是が人心特得の機能ではあるまいか。」

『世に強迫の歴史程、馬鹿な無意味なものはない』とコンコードの哲人が喝破した一句は、實に千古不磨なる至言である！

然り、迫害の歴史程自然律を無視した意義のない歴史はあるまい、水を山に上せ、沙泥で魚網を編まうとしても到底駄目な話、之と同じやうに、眞に靈的生涯の意義を感じして居る人には、迫害の弩弓も、何等の拘束何等の恐怖をも與ふることは出來ないであらう。

あゝ隆涯なき希望の海は、如何に烈しい迫害の中にも、甘じて混一融化するだけの胸を擴げて、絶えず吾人を勵まし慰めて居るのである。かくてバビロン城下のデユースは、人間極度の苦痛と迫害の中にも、尙異句同音に神の榮光を稱えたのではないか、

吾人は上記牢獄の自由に對して、衷心敬虔の意を表すると共に、又神の無限なる愛に向て心より歡喜の辭を捧げざるを得ないのである。所詮牢獄の作物は、儘

かに是れ精神の自由、神人の交渉、人文の一致を語つて居るのである。基督が『肉は滅びても靈は生くる』と宣ひし一語は、正に吾人の服膺すべき名句で、如上の妙味を示して餘りあるものと信ずる。

然矣、吾人は「靈」といふ寶器を胸深く藏めて居て、始めて此の世に「人間」といふ名乗りを掲ぐる資格を有するのである。靈的活動を知らぬ人間！之れ同胞に咀はるべきものである。吾人は貴き靈態に依つて、始めて天地の眞髓、尊き神の本體に接することが出来る。吾人は此の靈能あればこそ、不完全ながらも尙ほ神との交渉を續けて居るのである。

要するに、神の御心は天地を通し下界を周りて、如何に微細な些末な部分にも、常に働か動いて居るのである。あながち薄暗闇の牢獄とのみ限つたものではない。天は常に人類の友である。縦令人類には一旦の瞶に依て、苦痛災厄の表視と思はれても、却て是が無言なる神の御恵みであるのかも知れぬ。

嗟吁、神を恨み、天を疑へる人は、畢竟之れ自己を

疑ひ自らを咀へる人である。如何考へて見ても、吾等は絶對に神を恨みる資格はない者である。安じて吾等が全身を天なる大御神の御前に打ち任して、美しい信仰の妙味を感知するのが吾等人類の宗教的最高の境涯ではあるまいか!!

(完)

獨逸の教育家フランケー常にハルレー大學の學生に諭して曰、
活きたる信向の一片は死せる知識の一片より貴く貴き愛の一滴は科學の大海よりも貴し
敬虔の念ある人のみ社會の善き市民たるを得べく信向なき智識才能は寧ろ人を害ふこと多し云々



耶蘇の祈禱 (上)

鴻 峰 生

(ヨハネ傳第十七章の研究)

メランクトンが「曾て天にも地にも神の子が親ら
捧げたる祈禱よりもすぐれて高く聖く崇美なる聲
聞かれしことなし」と云へるは此章に載せられた
る祈禱なり。

此の祈禱は通常三段に分たる。イエスは此の場合
に於て先づ自己の爲に祈りぬ、これ第一段にして
最短短し(一節より五節まで)。次に弟子の爲に祈
るこれ第二段なり(六節より二十節まで)。次には
一層範圍を擴めて現在將來の信者の爲に祈るこれ

は第三段なり(二十節より二十四節まで)、第二十
五二十六の二節は全體の結果なり。

一イエス此言を語り畢りて天を仰ぎ曰ひけるは、父よ、
時いたりぬ。爾の子爾の榮を顯さん爲に爾の子の榮を
顯し給へ。

天を仰ぎたりとあれども必ずしも戶外なりと考ふ
るを要せず、晚餐を食せし序にて祈り給ひしなら
ん。神殿の庭こそ此の祈禱の捧げらるるに最も適
當なる場處なれば彼處なりしならんと云ふ人も
あり。時とはイエスの言へを用ふれば人の子の
榮を受くべき時なり(十三〇二十三)。イエスは母
に向ひて「我時は未だ至らず」(二〇四)と云ひし
始より萬事につけ時てふ思念常に深かりしことは
此の福音の著者の最も意を致せし所なり(七〇八、
九〇五、十一〇九等)今や時の中にて最も大なる
時到りぬ曰爾の子の榮を顯すとはイエスの死
と復活昇天に現るとき榮光を云ふ、此等の事實の
中に天父の聖と愛の世に顯ることこれ即ち神の榮

の顯ることなり。イエスの十字架と復活の昇天に榮光ある所以は、神の榮此中に顯るればなり。イエスは十分にこの目的と成し得んことを祈れり。二これ爾我に賜ひし者に我か永生を與へんか爲に凡ての者を制むる權威を我に賜ひたればなり。

此節はイエスが第一節の祈を捧げ得る理由若くは基本を言へり。神は人類の首(凡ての者)とあるは原語凡ての肉とあり人類のことなり、他の萬有生に言ひ及ばず)だる權威をイエスに賜へり。この權威を賜はりし目的はイエスの權威に服する者に永遠の生命を與ふる爲なり。イエスの權威は愛より發したる權威なればこの權威は十字架ありて初めて完成せらるるを得べし。之を完成する爲に第一節の祈りをなすを得又なさざるべからず。イエスの祈禱は生涯を貫ける精神を基礎として捧げられたり。

三永生とは唯獨の眞の神たる爾と其の遣ししイエスキリストを知る是なり。

これはウエフトコットの云ひし如く「範圍を定むる定義にあらざりて眞髓を明にする定義なり」知ると云ひ信ずると云ひ、居ると云ひ見ると云ひ、ヨハネは之によりてキリストと合致して其の生命に聯る事實の種々なる方面を言ひ表せり。眞に知るには其者と精神上の一致あるを要すればなり。單に外部の知識、學問上の知識はヨハネの指す所にあらず。而して茲に用ひある知ると云ふ、字の時格に連續進歩の働を示す、知識は絶えざる活動なり。活動なき生命はあらず。此處にイエスキリストとあれともイエスは在世の時自らイエスキリストと云ひ給ひしことなく又云ひ給ふべしと思はれず、これは此書を著す當時の稱號を用ひたるものと見るべし。ヨハネの言がイエスの言の中に混したる一なり。

四我れの榮を世に顯し爾の我に委ねし所の行は我之を行せり。之父よ今我をして爾と偕に榮を得させ給へ即ち創世より先に爾と偕に有ちて行ひ榮を得させ給

へ。

第一節は將來爲すべき事業に基きて榮を祈りしが、この節は既に世に於て與へられる事業を成し遂げし事實に基きて同行ひをなし給ふ。彼は希望なり、此は回顧なり。而して回顧の歸着せざる處は、天地の成りし前父と偕に榮を有ちし時に在り。『父より出し、世に臨り復た世を離れて父に往く』之を信したるイエスの前にも後にも大なる榮光あり。この榮光は愛の光榮なり。二十四節にある如く、世の基を置かざりし先より神に愛せられたる榮光なり。

六爾世より選ひて我に賜ひし人とに爾の名を顯せり。彼等は爾の屬にして爾己に之を我に賜ふ。彼等か爾の道を守れり。

之より以下弟子の爲の祈りとなる。爾の名を顯すとは聖くして愛なる神を知らしむるを云ふ。彼等は爾の屬にして、彼等は元來眞理を行ふ者又神に遵りて行ふ者なりき(三〇二十一)。己の良心に

忠實にして又既に受け得たる光に忠實なる精神は、神の屬たる素質を有せり。神素より彼等を教育して之をイエスに與へ給へり。こはイエスを信する者の自ら爾か思ふ事實なり。爾の道を守れり。イエスによりて啓示せられたる眞理を總へて云ふ。神の教育と附托空しからずして弟子は神の道に遵ひ之を守りたり。

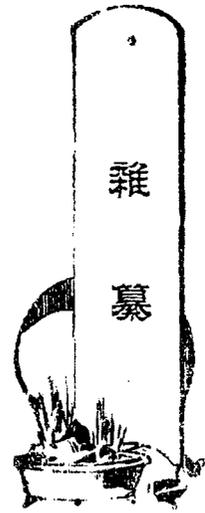
七彼等今爾の我に賜ひし者は皆爾より出てしと知る。そは我れ爾が我に賜ひし言を彼等に與へたればなり。彼等之を受け、又我れ汝より出てしにとを誠に知り、爾の我を遣しことを信したり。

此の兩節は六節に「彼等亦爾の道を守れり」と概説したる事實を分解して弟子の信仰の生長し來りたる歷程を語れり此等の所は願ひ求むるにあらずして神に語るなり。眞の祈りには必ず此れあり。爾の我に賜ひし者とは人を云ふにあらず、イエスの教訓なり行爲なりこれ皆神より智慧と力とを賜はりて成したるものなればなり。此二節に記せら

れたる信仰の生長の一面は、イエスの教よりイエス自身に進むにあり。イエスの言行は神より出て神を表すことを知りて（又實際イエスの言行は神より出てたるものなれば斯く知らるるは當然のことなりと、益我れ爾が我に賜ひし言を彼等に與へたればなりとの挿人文の意是の如し）之を受く、これ、信仰の第一歩なり。之より以下の歷程は受け、知り、信するの三語を聯ねて表されたり。イエスの言を信仰して之を受くるより知識生し信仰生す。知識の中樞はイエスの何人なるかを知るの知識なり。イエスの教訓を聽き其の品性に接して、其の世間の産物にあらず神火の出でしことは實驗して知り得べき範圍に屬す。然して同じ事實の天の一面なる神イエスを遣したることは信すべくして知るべからざる事に屬す（二十五節には、彼等も爾の我を遣しし事を知れりとあれども、其處には別に段階を分てるにあらざる故信するの意に用ひたるなり此處も矛盾せるにあらざらず。

九我れ彼等の爲に祈る。我が祈るは世の爲にあらず、爾の我に賜ひし者の爲なるのみ、彼等は爾の屬なればなり。

我が祈るは世の爲にあらず。イエスは十字架の上にて已を殺す者の爲にさへ祈り給へり。されば世の爲に祈らずと云ふにあらず。イエスは斷えず世の罪人の爲に祈り、給ひしならん。然れどもイエスは先後緩急の別を重んじ給ふ。この際最も急なるは先づ之によりて世を救ふべき弟子の爲に祈ることなり。之れ彼等は爾の屬なれば也。イエスは神の業を爲す爲に世に遣されたれば神の愛する者を愛し神に教育せられたる者を教育し之が爲に祈るは當然の事なり。



雑纂

クリスマスMASの贈物とクリ

スマスの心

プリンストン
大學教授博士
ヘンリー、ヴァンダイク

一年の中で一定の日に贈物を交換する習俗は、降誕節よりもズット古い事であつて、又決してクリスマスMASのやうな深い意味のあつた譯でもない。此の習俗は殆んど世界中古今に通じて多くの異つた民族の間に行われて居る。それで此の事は場合次第で、善い事ともなり、又は馬鹿氣た事ともなるのである。即ち親みを加ふる事ともなり、又は唯だ世間並だから爲るといふ事ともなり、好意を表す事ともなり、『又は諂媚を求むる事ともなり、寛かな氣前の發現ともなり、又は貪婪の

假裝せるものともなるのであつて、之を動かす精神と、其の現れた形狀との如何によつて、喜ばしき古い風習ともなり、但しは一種無益な芝居のやうなものともなるのである。

併し此の古い贈答の日につきての傳説が、種々に解釋せらるるに拘らず、一度びそれがクリスマスMASの季節に遷移してより、忽ち此意義を一變すべき思想と、高き理想に引き上ぐべき模範とに遭遇したのである。即ち此の模範はイエスの生涯であつて、此の思想は他人の幸福になるやうにと心掛くる利己の念の無い心である。

イエスが世に送られた最大の贈物は御自身其の者である。イエスは人々と共に住ひ、又人々の爲めに生き玉ふた。彼れは何物をも惜しみ玉はなかつた。彼が或る人々に與へられた特別な御自分の贈物には、孰れも夫れ／＼其の物を貴くした所の御自身特殊の何かがあつたといふ事である。

例へばガリラヤのカナに於ての婚宴の時には、其の

主人の心情を慮られ、又客人各自にも相應な饗應に與らせ度いと望まれた。彼が給せられた酒に天來の欸待てふ風味を與へ玉ふたのは此の故であらう。

又イエスが夫のゲネザレ湖邊の山地遙かに隨ひ來つた饑へたる群衆に、パンと魚とを與へ玉ふた時は、其の人々は自分等が與へられた食物に依つて、體力を得たと共に、其の心にイエスが親しく自分等の安寧を慮かつて下さるといふ事に感激して、活氣と力とを加へられた次第である。是は「愛心籠れば野菜の食半」も美味を覺ゆる一例であらう。

又イエスが種々なる病者に下し玉ふた癒治の賜は、孰れの場合も彼御自身の物、即ち其の思想や同情や大なる能力などを共に住ひ玉へる世の男女の者に分け與ふるを喜び玉ふ表徴で無いものはない事である。或る時中風の者が寢臺の儘イエスに連れ來られし時などは、先づ其の惘然な望みの無い人に赦罪の事を宣言し其の後彼が身體に新生命を與へ玉ふて、總ての人々を驚愕せしめ、又多くの人々に反對の心を起さしむるに

至つたのである。これは外では無い、イエスが何か、與へらるる前に心に考へられたからである。それは人々の心の奥底にある必要を満たし玉はんと思はるるからであつて、且つ實際孰れの賜にも、何か御自身の物と分與せらるるからである。總てのクリスマスの贈物は此の模範に倣ふべき筈である。

尤も總ての物が真面目な謹嚴な物で無ければならぬとは限らぬ。何故なれば多くの場合一寸欲しい物が、一寸面白るような物か、又は一寸した友情の表徴であるからである。それで此の心情が其の表徴の品よりも貴い筈である。若しそうで無いとすれば、贈物などといふ事は眞實はクリスマスと關係の無い事となるのである。

斯ういふ心得で贈物をするには、時間と勞力と、そして利己的にならぬやう力を盡さねばならぬ。併し是れが此の季節に適した唯一の仕方である。

それで最良のクリスマスの贈物は一番高價な物では無くて最上の愛を表す品である。

然るにクリスマスは極く偶たまにしか來ぬものであつて、一年僅かに一回、而かも直ぐ又過ぎ去つてしまひ、其上たゞ一晚と一日のみである。それで若しこれ丈に過ぎない事であるとすれば、其の壽命は夫の大通りの隅の方に居る玩具屋で買ふた一寸した玩具と撰ぶ所はあるまい。此等の玩具は一時間位は工合が宜しいが、其の後になると彈機が毀れる、手足が外づれるといふ風で、最早芥溜の量を増やす外役に立たぬ事となるのである。

併しクリスマスといふものは決して斯様な事で終らなくても良いもの、又終るべき筈では無い。若し此様な物だとすれば一年間否やな利己的の屈託から離れて僅か一日丈仁慈の時を過すといふに過ぎぬ譯で、利己的な人種の奴隷町に舉行せらるる嬉遊を、唯だ一晚丈樂しむといふに止る次第ではないか。若し何れの贈物も自分の考へたもので、友情の表徴であり、自分の事を忘れて人を喜ばし度いといふ心情であるとすれば、其

の思ひと感じと興味とは、贈物が終つた後迄も殘存つて居るであらう。

其の贈物は手輕な品であつても、但しは珍貴な長く欲しがつて居たものであつても（其の品物が金製であり、銀製であり、鐵器であり、木造であり、陶器であり、或は僅かに赤楊樹の皮を巻いてこしらへた杯であるを問はぬ）孰れも以下に述べる様な心情を傳ふる事が出來よう。

「今日はクリスマスでありますから、私は貴君の事を念ふて、貴君の幸福を願ふて居ります。そして明日はクリスマスの翌日であるから又貴君の幸福を願ひまじやう。そして斯様な風に一年中ズット貴君の幸福を願ひ續けまじやう私は毎日此の事を貴君に申上ぐる事が出來ぬかも知れませぬそれは私が遠方に行く事もあらうし、兩人共極めて多忙である事もあらうし、又そんなに澤山の手紙を出すには切手代に窮するでもありまじやう。又夫程手紙を書く時間が無いかも知れませぬ。併し此様な事は如何やうも構い

ますまい。私の考へと願ひとは何時も同じであります。私の事業なり世上の用向なりに就ても、貴君に對し少しも不實を爲したり、又は損害を掛けぬやうに心掛ける様であります私に喜がある時若し貴公が共に居らるれば、其の喜を共に分ちたいと存じます。そして何事によらず貴公の喜樂と成功とは亦私の喜となるのであります。私はお世辭ぬきて、平つたく唯だ貴公に好意を表すと申し上げます。是れが私のクリスマス精神と思ふて居る所であります』

斯様な消息を傳ふるに誇大の語を用ひて、限り無き景慕の情と變らざる切愛の念とを誓約する必要は決して無い、愛や友情には純金主義にて絶えず少しづつ拂ひ込む事が莫大なる約束手形よりも優つて居る。又何時も斯様な消息を全く言語に表はす必要も無い。況して手に握る事の出来る表徴を用ひて此の意を傳ふる事は尙更の事である。先づ自分で感じて次に實行するといふ事が主要の件である。

此の世には我等の多少知つて居る人々であつて、種

々の故障でクリスマススの贈物を送る事を果し得ない多くの人々がある。併し總べて我等が知つて居る人々で、降誕節クリスマス的生活の感想を交換する事の出来ないものは恐くは一人もあるまいと思ふ。

それで其の外圈を言へば、喜ばしき挨拶と、感歎と、尊敬とである。内圈をいへば、内情ある感興と、心からの慶賀の念と、率直なる鼓舞心とである。そして極くくの内圈をいへば同伴者の心と、力添となる心と、物優しき心とである。

『美しき友誼は日と風とに鍊り試めされ

日々の俗塵にも耐へながらふ』

畢竟するにクリスマススの心事はクリスマススの贈物の最上なるものである。

小火

橋 彈 碁

かぞへ日びになつた十二月十五日くわじつ、夜よるになつても晝ひるの

風はやみもせず、ますく西北の風は勢すさまじく吹きしきつて、風に追立てられたか真黒な、底青い寒さうな雲は見るく月影を覆ひ隠して、今にも霰か雨かに降つて来さうに見えた、往來の人の足音もそれに急調になつて、家外の寒さ冷たさはまたひとしほであつたが、物音の絶え間には警鐘の響が聞える、あゝ何處にか火事があるなと夢み心地になつて厚くもなゝい夜具にくるまつて寐て——醒めて新聞を見ると、見出しに「小火一途」として六號活字で、細く短く何區何所何番地と出て居る、つい讀むとはなしに點讀して行くくと、牛込區南榎町——福家富藏と云ふのがある。私は吃驚しました。この福家は私の無二の親友でして、福家の宅は私立貧民學校なのです、表札には出してはありませんが實際福家は毎晩貧しい家の小供を集めて讀み書き算術を教へて居るのである。私は朝飯がすむなり本郷の家を出て電車に乗つて、神樂坂で降りて南榎町を見舞つた。

貸家の割に堅固に出来て居た家であつたが、今は黒い

灰、白い灰になつて了つて、たゞ鐵瓶ばかりが鑠けもせずに残つて、水蒸氣は無念に立ちのぼつて居り、野ら犬は二三疋寄り集まつて愉快さうに遊むて居る、焼跡へは六七人の女生徒が、眠むさうな泣きはらした眼で何物か探して居る。私は其側を通つて立退所へ福家を訪ねた。

多分彼は泣いてるだらうと思つたら、意外!!彼の顔面の何處にも失望の影さへなく、速に烟や何にやらで黒ずむては居たが、至極平和な態度で、寢巻一枚で震へながら私の顔を見るや否や、常になく笑顔を作つて、

「君の所へ端書を出さうと思つて居た處だ、さあ此方へ上り給へ……此の通りだ不殘焼いちやつたぞ、而し身體には怪我がなくて喜むて居る。」

私は餘り福家が元氣が善いので、慰さめてやりに行つて却つて慰さめられるやうで黙つて居ると、彼は續けて言ふ、

「けれども僕は今迄神の榮光を表はさん爲に働らいた

に係はらず、神は無慈悲にも家を焼いたなどは愚痴は云はない積りだ、僕は不平は更にならない、百約の事に較べたら何でもない、地のことを思へば悲しく思はぬでもない多年辛抱して造り上げたのが無くなつたのだから、が然し神の御心の有る所は我々の窺ひ知るべからざる所で、天のことを考へると益々天國の寶多き様に思はれて悦はしくなる。」

何とも挨拶の仕様がなく、私は眼を閉ぢて兄弟の爲に祈りました。もと福家は信仰も何にもない人でしたのを、妻君と私との勤めて基督教信者になつたので、ちと引例は不適當ですが、彼はキリストの如く、私は靴の紐を解く値さへないもの様になりました。處へ外から奥様は今年三才になる嬢ちゃんを連れて歸つて來た。

「どうも昨晩は飛びだことで御座いまして……」

「早速に有難う御座います、貴君どうして御存じなの……」

「今期新聞で見たのです、で……」

と辭を次せないで妻君は、

「でも香川さん！私は大變嬉しく思つてゐるのです、よそら火事だと云ふと直に……貴君あの小ちやい女小供が驅け付けて働らいて呉れて……ねあの風だからとても無益とは判かつて居ても其は……」

と言ひ澀む、

「其からね香川君、まだ悲しみ中の喜があるのだ、僕は自分や家内のものは如何でもなるが、實にあの生徒の學業を休ませるのを非常に苦に病むて居た處が其もどうやら、當分無家賃で貸してやると云ふ家があつた安心した、僕は動かずに居て諸方から色々なものか出來て來て、今朝からでも何度神に感謝したか知れぬ。」

と、今度は奥様が、

「先刻もね、私焼跡へ參りましたら、生徒が探し物をして居るから、何を探してると尋ねたら、四五人寄つて相談して話してもい、わと言つて云ふのを聞く、兼て校舎の新築の話のあつたのを知つて居て、

其の費用の貯金ぢやさうで、幾回位ときくと、何ん
でも一圓にはたりないと云ふのでしよう、小供は學
校が四五圓で建つと思つて居るのでしようか!?
私と、福家、福家の奥様は暫く無言で居りました、
成程小供の探して居たのは金であつたのか、私は祈る
度に福家の家庭生徒の上に豊なる神の恵を下されんこ
とを加へるのである。(完)

眞澄の雫

加奈子

此の年師走の始、親しき友を新橋に送りての歸り
さ、獨り明月の影を浴びつゝ、冷かなる夜風の窓、
すゞろに古りにしさを偲びて家に歸りつ。何かと
友の紀念をあさりゆく中、ふと此の一篇を匣底に見
出しぬ、こは三十七年の冬、篇中の兒の猶ほ學習院
幼稚部にありし當時の詠なれば、今さら此處に取り
出すもおかしけれど、友を偲ぶすがのなほ此にも

現はれたるがなつかしさに、句節などもわざと昔の
まゝに残しおきぬ。見ん人深くな咎め給ひと。

一

わびし荒野に唯ひとり
さくや眞白の花一枝
清く妙なる麗はしき、
胸に色香の露かほる。

朔風すごく空さむみ

窓ふさちろす六つの花

ながめもあかず團欒して

爐邊に興もあかすかな。

二

つぼみの花か頬のへに

緑りの髪ぞこぼれたる

最愛し乙女はあまさかる

詩神の寵兒よ、神なるよ、

涼し顔の面微笑たゝえ

膝の上かろく凭れつゝ

歌ふ優しのそが聲は

雲井はるかに響くなり。

三

虚偽おほき世なりとやど

あらし、流露の天の美は

やさし乙女の命なるを

湧くや甘しき靈の水!!

現か夢か、我れ知らず

紅葉の御手に口つけて

抱く手おもへず聲震ふ

あゝ「ミューズ」なる最愛兒よ!!

四

あゝ「ミューズ」なる最愛兒よ!

やさし笑顔もぞらだのみ

かゞやく愛の兩眼には

あはれ眞澄の露しげし!!

「母ちゃん、あたゝい「ミューズ」だつて……」

むせぶ涙のこゑともに

歌も止みたり窓の邊に

吹くや嵐の音いと凄し!!!

渡頭のなごり

六 州

霧いとしげき遠山の麓、煙立ちのぼる川沿の一村、
自然の刷毛に浮び出でたる四方の姿、やう／＼薄れ行
くまゝ、微茫たる夕靄天の一角より瀾漫し來りて、隠
れ行く夕陽の光に眠れる如き天地は、忽ち紫雲の絢爛
たる色彩の中に織り込まれぬ。車はひた走りに走りて
流水のほとり田園の間を縫ひつゝ、今は遙かに我が里
の境を越えぬ。

頃しも秋の初めつ方とて、夕風ゆるく渡る毎に、丘

邊の木々先づゆるぎ、田畝に黄ばみたる波を描きつるは、又一入の眺めなり。夕暮染むる有明の海の面、燦爛の、色彩金紛の美畫を展ばし、が如く、颯々たる夕の風、水を蕩漾して白帆の影、金波をわけ行ける様をみては、雄麗の詩趣、心淋しき旅客の胸を慰む可し。

夕暮深くなるまゝに、紫雲低う翳き來て、小徑を辿り行く田夫、森陰に漏るゝ人家、遠きも近きも朦朧に見え、家路を急ぐ馬子の歌、遙かに堤のあたりより起りぬ。模糊の中に渡り來る其の聲の哀れげなる、夕告鳥の其れよりも一入身に沁む心地して、只管急ぎ行ける時、何處よりもなく憂々の聲、鉦々の音。

向ふ一帶の森、古びたる鳥居の半ば木影に見えたるいと床し。これに連なる堤の並木、高さも低きもなべて黒く生ひ茂れるが、やう／＼近くなり來りて木々數へぬ可き程、忽然として人影物影現はれて、水を切り行く憂々の聲、手にとる如く聞ゆ。是れや細霧の中に入り行く江上の舟なりけり。

こゝは某しの渡しとて、未だ橋架の設けなければ、

舟もて渡せるなり。我は俵を下り、今此方を離れ行し舟の歸り來るを待ちぬ。

仰けば夕陽全く淡紅の色を隠し、颯々の風は漑々たる水の面を風き渡り、堤上の樹影、渡頭の茶店、模糊又漂渺、外餉炊く泊舟の煙、縷々江上に飄翳さ其の神韻ある幽趣又譬へつべき物もなし。

波の音、潮の色、限りなき感興を抱ける間に、漁歌東に起れば頓て岸邊に迎ふる乙女の温き聲と化して、夕の平和を守れるは、此の夕潮に歸り來し漁舟を迎へけるらむ。

暫しは此のけしさに茫然たりしが、やがて我が追懐の鳥は想像の翅にのりて、江水の清きほとりにあこがれぬ。

思へば早や一年の昔とはなりぬ。去年の此の日我は均しく我家を辭して東都に向へり。時に歸る鳥の聲に心急ぎて此處迄來りし時、我が俵の後を追ひ、一散に走り來る小犬あり。近づきけるに、いかでかくとは思ひや、日頃我がいつくしみける我家の小犬なりけ

り。あゝ彼は長途の勞れを忘れて我を慕ひ來りしなり。久しく慣れし主の道の、つれづれを慰めんとて來りしなり。彼は無言なりき。されど其が歡喜のさまは、如何ばかりなりしぞ。彼は我が去り行くと知らざりしなり。否知りたりし彼は……。あゝ我は今彼を見棄てざる可らざりき。

我は走り寄る愛犬を制して小舟に飛び移りぬ。犬は尙舟に迫れり。されど彼が厚き心は舟人の櫂棹に妨げられて、哀れげに我が顔を打守りぬ。幾度か感謝の辭を心に繰り返しつゝ、我は對岸に上りけるに、犬は尙悄然として汀に立てり。あゝ我が心の如何ばかり苦しかりしぞ。……無言、沈黙、遂に彼は情なき江水の面を隔て、隠れ行く我姿を見守りぬ。

あゝ之去年の夢とはなりにけむ。去年の末の方、彼は長へに逝きて、我が再び音づるのを待たざりき。あゝ彼は忠實なりし。されど我は殘虐を與へぬ。

黄昏秒一秒に江上を包み來て、樹影落寞、冷かなる風は汀の枯葦を鳴らして、宛然世の荒波の中に殘され

し孤兒の叫びとも思はれぬ。時しも遠く鐘の聲、一杵二杵又三杵、陰々として寂寞より寂寞を破りて響さぬ。あゝ何ぞ其の怨むが如くなる、何ぞ悲しみ我を責むるが如くなるや。

噫我は地上の平和を咀はんが爲に生れたる者に非ず。殘虐の鬼とならんが爲に來りし者にも非ず。されど不幸にして我は惡魔となり、鬼神とはなりぬ。罪なき小犬は如何に此の惡魔と鬼神とを恨みたりけむ。

されど我はもと惡魔にも非ず、鬼神にも非ざるなり。我は心より彼の眞心をめてにし者の一人なり。然も唯彼一つの誠心をのみ！

あゝ偽善の世、假裝の社會、我れ一の光明を見ず、我一の眞心を知らず。然るに彼れ小犬の、さしき其れによりて表はされぬ。然も彼れ既にあらず。あゝ何時かは詫ぶべき時の來るべき。

誰やらん、我を呼ぶに不圖顧みれば、舟の翁の我を促かせるなりけり。日はまたく没しぬ。新星の影一つ古松の枝にかゝりて、いと淋しげにまたゝさしけり。



女子青年會記事

● 讀者諸姉に訴ふ

一 記 者

時の流は滾々として盡くることなく、いつを初めとし、いつを終りとするを知らず、歳暮といふ年始といふ、そは人がこの不斷の流に勝手に掛け渡したる橋に過ぎず、天地の悠久より見れば何等の意味なし。されば年の背戸に立ちて一憂一喜するは聞えぬ話なり。ト一言に云つて仕舞へばそれまでにて、亦一面の理窟なきにはあらず。しかはあれど斯る事を云ふ人達は餘程の變り者にて、悟り過ぎたるか、將た悟り損ねたるか、いづれ凡人にはあはさざるべし。然れども我等の多くは凡人なり、悟り過ぎもせず、悟り損ねもせず、社會意思の潮流に掉さして、其方向に従ひ進みてしかも悔いず。是を以て世間なみに歳末の感あり、年頭には年

頭の思を懐く。されど人の目が顔の前面にある以上は、ボールの如く前に在る物を望見して前進するが順當の事と思はる。徒らに首を廻らして、歸らぬ過去を望みても、英雄が神仙に早變りする様な理窟には參り申すまじきなり。されば我等をして口を噤んで、歳暮の感懐を語らしむる勿れ。

若し夫れ新年の思念はそれと其撰を異にす、過去は既に我物に非ず、されど未來は自己の手中にあり。之を聞くせんも、四角にせんも、卵形にせんも、長方形にせんも、將た又長くせんも、太くせんも、我が捏り方一つに在り。されば我等互に思想を交換して、其の未來の捏り上げ策を研究せんも亦興味あるわざならずや。

是に於て乎、諸姉に一つ御相談あり。そは外にもあらず、諸姉の明治四十一年を迎へられし時の感想を率直に記述して、本會に投稿して給はらずや。文飾は避けて、眞面目に諸姉の心を直寫して示し給はば、我等の参考となるべきもの少からずと思ふ。次代の國家の

一部を經營する責任を帯びたまへる諸姉は、知らず何如なる新年の決心を作り給ふや。玉稿を給はる方は何卒次の規約を履行せられたし。

一、行文は簡明なるを要す。

二、行數は制限せざれど、短くて引締りたるを、よしとす。

三、姓名は明記せられたり、但し誌上に雅名を用ふるは差支なし

四、投稿者は女子に限るも年齢の上は制限なし。

五、議論は避けられたし、記者の聞きたきは諸姉の感想又は決心なり。

六、年始狀が大晦日に舞ひ込む如きは、餘りにほめた話にあらず、されどあまりに御念の入りすぎても雑誌に掲載が出来ざる様になり申すべければ一月七日までにいたゞく様にしたし。

七、投稿は東京市麴町區土手三番町基督教女子青年會宛のこと。

八、秀逸なるものは一月發行の『明治の女子』に掲

載す

九、文章の採否は記者の權内に任されたし。受信後の原稿は一切返却せず。

十、文體も内容の範圍にも制限なし、只眞面目なるを要す。

青山女學院内青年會より

の通信

前略今日本院長より我校に於ける青山學生キリスト教女子青年會組織の梗概の其後の狀況など詳しく報せよとのことに候まゝ、只今取りいそぎ左に一般の概況を御通知申上げ候

青山學生キリスト教女子青年會

組織の梗概と其後の狀況

今や學界の進歩日に月にめざましき効果を奏すれども一步を退きて鑑みるに宗教界はいたづらに形式にながれ會は多きに失して振はず精神の修養は毫も省

みるの逞もなさにいたりぬこゝに於て本院内の同志の姉たちひそかに之をなげきて遂に明治四十年十月十一日本院英文専門科有志者は新に一會を組織して大に宗教上より各人の品性修養をなすとも引ては社交的に宗教を紹介せんとしてこゝに學生基督教女子青年會則のもとに青山學生基督教女子青年會と組織せり

十一月二十二日午後三時半より本院構堂に於て本會發會式をひらく當時はミスマグドナルドの有益なる演説を初めん來賓及生徒の祝辭ビヤノ獨奏其他種々おもしろき催有りて五時近き頃閉會せり

十二月一日(日曜日)山田寅之助師をまねきて幽遠なる御教訓を仰さぬ

其他毎週日曜日及火曜日交代に祈禱會を開く現今有志の會は僅に三十名全く教師の手よりははなれて力もなく經驗もなくなつたゞ天の助をもとめる本會を設立するにいたりぬ

ぬがはくば諸姉 生れてなほ日淺き我か會に神のみ

めぐみいよ／＼ゆたかに本會をして或は校内に或は社會に大になすところ有らしめ給はんことを祈りたまひてよ

右はたゞほんの大略にすぎず候重なる活動は來學期に顯るゝ筈に候まゝいつれ其時はまた御しらせ申し上ぐべく

先は取り敢へず一ふて御通知まで

青山學生キリスト教女子青年會

書 記

ウ井ルミナ女學校女子青年

會報告

寒さの候と相成候處貴會ます／＼御盛榮の段奉賀候
扱十一月中の當青年會の報告は左の如くに御さ候
十一月六日講演會を開きたりミスマグドナルド神戸
に趣かれし歸途立よられて我ら青年會員の爲に青山
教頭の通譯をもつて青年會の創立せられし所以及び

青年會員の責任につきて誠に有益なる講話せられたり當日集會者二百三十二名なりき

二、各組に於て聖書朗讀會なるものを組織して毎朝授業時間前十五分間を割きてこれに充て聖書を十五六節づゝ讀み其余りし時は各自隨意に祈る事となし居れり此會の結果によりて未信者の姉妹のすてにキリストに従はんと決心せられし姉妹三名あり

今各組に於て讀みつゝある書は高等科 舊約書中の詩をぬきて讀みつゝあり

本科五年歴王記略上

同 四年帖撒羅尼迦前

同 三年詩扁

同 二年馬太傳

同 一年馬可傳

三、十日より十六日に於ける所禱週間には特別時間を設けて會員一同集合なしあたはざりしが故放課後各會員は隨意に青年會の室に集合して同じ主意の下に祈せり

十三日の水曜日の定祈禱會には特別其爲に祈れり、青年會の仕事會の働として今度學校用品をすべて販賣する事とせり其利益を各種の慈善事業の補助となさん爲なり

右の如くに御ざ候也

扱第四卷第九號の明治の女子に當校青年會報告中

集合者平均百二十名とあるは二百二十名の誤に座候間

こゝに正し申候

ウキルミナ女學校青年會 書記

同志社女學校女子青年會報告

拜啓御畫面拜見仕り候御申越しの當校に於ける女子青年會の規則としては未だ別に印刷も致し居らず其内にいろ／＼不便なる點も有之候まゝ印刷致し度くと考へ居る處に候へ共出來次第御送り申上べく左様御承知下され度願上候

只今當會の働としては一小日曜學校を開きそれが費

用を支拂ふ事及び一ヶ年金三圓日本婦人傳道會へ寄附致す事とに候追々にはよろしき動も取り度く望み居候集會は一月に二度又別に一月一度聖書研究會を開き居り候先はあらましの御報知迄草々

同志社女學校女子青年會

十月二十七日

女子青年會本部委員 御 中

横濱共立女學校青年會情況

目下正會員四十三あり、そのうち役員三名、委員十五名、役員は左の如し、

會長 飯田琴子 會計 大石俊子 書記 吉田道子

委員會は隔週月曜日に開き、事務執行委員會は同週木曜日に開催して各部の報告及各協議をなす、

各部集會は一月のうち一回づゝ、即ち金曜日の午後三時より三時半までを之に充て、一月の第一週金曜日は傳道部、第二週は矯風部、第三週は祈禱會部、第

四週は慈善部、若し第五週金曜日もあるときは之を以て青年會大會となす、文學部集會は一月の内一土曜日を撰び之を開催す、

プール女學校青年會報告

本會は曾て設立せられしが長らく中止の姿となり居りしが本年三月再興せし次第にて其働も徹々たるものに御座候が諸姉の御獎勵と會員一同の熱誠な祈禱によりて僅かづゝ働をいたし居り申候

現今會員 八十名

内準會員 二十七名

役員は左の如くに御座候、

一會 長 トリストラム

一會 計 吉本 あさ

一書 記 田中 そと

一祈禱部長 木庭 ふさ

一慈善部長 酒井 まさ

一 慰問部長

岡村 まこと

一日 曜學校部長

副島 さわ

一 祈禱部長の指揮の下に各々司會の任に當り每週火、
金二回開會す

但し一回火曜日通學生の爲め

一 慈善部は重に裁縫、縫物をなし其に因りて得たる金額を慈善の爲め適宜に使用するなり每週金曜日午後四時より五時半迄開く事に候

一 慰問部生徒の中に病人あり又附近頃より可憐な紡績の工女が臥床等に花とか、カードとか其他適當な品物を持參して慰問をいたし居り申候其實況は次號に記し申候

一日 曜學校は現在二ヶ所あり尙ほ多數の姉妹等は他の三ヶ所を授けに行き居り申候

過る週間定められし題目によりて祈禱週を守り多大の利益を得申候

片 々 錄

大内淺子氏逝く

芝區三田普連土女學校教師大内淺子氏は急性腹膜炎に本月二日逝去せられぬ、氏は矯風會及び王女會等に盡力せられ且つ我が基督教女子青年會發會後本會にも多大の興味を以て夏期講習會の折などには大に盡されしが前途爲すあるの身を以て突然永眠せらる悼むべし。

平野はま子氏歸朝

本會中央部委員平野はま子氏は去る五月三井氏一行と共に歐米漫遊の途に上り西比利亚を経て歐洲に入り諸大府を尋ね大西洋を渡りて米國に遊び遂に先月十一日無事歸朝せられたり。